

---

# 古国の末姫と加護持ちの王

空月

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

古国の末姫と加護持ちの王

### 【Zコード】

N3773X

### 【作者名】

空月

### 【あらすじ】

古国イースヒヤンデの末姫であるリルは、誕生日に兄たちからもらったプレゼントのせいで、海向こうの大陸にある砂漠『アズイ・アシーク』に飛ばされてしまう。そこに倒れていた少年を助けてみれば、彼は『魔法大国』シャラ・シャハルの王だった。ただし、リルが知るより格段に幼い姿。

そして彼女は知る。王位を継ぐはずはないと誰もが思っていたにも関わらず、【加護印】持ちの王、アル・ラシード・リューン・シャ

ン＝シャハラが誕生したその理由を。

不本意ながら訪れることになった砂漠で出会った（拾つた）相手が他国の王様（予定）だったために、知られざる過去の王位争いの一端に巻き込まれる女の子の話。三人称で進みます。主人公設定上、ハラハラドキドキはあんまりないかもしません。

月光に照らされた男の顔は、喜色に彩られていた。

「ああ、長かった……」

万感をこめて呟く。

「何十年も耐え続けてきたような気がするが 実際には十年足らずか。私は存外堪え性のない人間だったのかもしぬ」

自らの足元に転がる人物の顔を覗き込む。これから自分に起ることを知らぬが故の無垢な寝顔に、歪んだ笑みを浮かべた。

「お前自身に非はない。罪もない。それは知っている だが我にとつて、お前の存在は邪魔以外の何物でもないのだ。言つてしまえば、お前の存在そのものが、罪と言えよ。」

そつと、その額に浮かぶ【加護印】ジャガーンに指を這わせる。憎く、疎ましく、目障りで 羨望と嫉妬を抱かせる、その印。

「その印さえなれば、もっと長く生きられただろ?」

……かわいそうな、我が弟よ。

囁いて、男は手筈を整えるため、その場を離れたのだった。

## 気付けば砂漠

青と、金。

それが初めにリルが認識したものだった。

「…………」

ぐるりと周囲を見回して、絶句する。

見渡す限り広がる、金の砂が広がる大地。抜けるような青空。建物どころか影すら見えない。

太陽がじりじりと肌を灼く。とりあえず装飾の薄布を解いて、頭に被つた。多分ないよりはましだ。

「ええと……？」

もう一度辺りを見回してみる。何度か瞬きをしてみたものの、景色は変わらなかつた。ついでとばかりに頬を抓つてみても、鮮明な痛みはこれが現実だということしか伝えてこない。

リルはあまりのことに頭を抱えしゃがみこみそうになつて、寸前でそれをやめた。

（……予想外のことが起きたときは、まず状況把握に努めるべきだ  
……つていつもザード兄様が言つてるし）

深呼吸を繰り返して、自分を落ち着かせる。そうして二度周囲を確認した。見渡す限りの金色の砂丘は、遮るものない太陽光に照らされて、痛いほどに存在を主張している。

しかし、リルの住まう国、その周辺、もつと言えば大陸に 砂漠は、ない。

そもそもリルは、この砂漠を認識する直前まで、自分の部屋にいたのだ。なのに屋外であることからしておかしい。

これが夢でないと仮定するのなら、考えられる原因はひとつ。超常的な力が、この状況を作り出したのだ。

リルは少し考え、右腕の腕輪に触れる。中央に嵌められている赤の精霊石<sup>イース</sup>を定められた通りに叩き、思念でもつて呼びかける。

(イース・ナアル=【焰】、緊急事態なの、出てきて)

数秒の間があつて、精霊石<sup>イース</sup>が明滅した。精霊石から赤い光が飛び出て、宙に浮かんだかと思うと発火する。炎はみるみる勢いを増し、人の背丈ほどに膨れ上がったと同時、唐突に消えた。そこに人影を残して。

それは、リルより頭一つ分ほど背の高い、男の姿をしていた。少年というには老成した雰囲気で、青年と呼ぶには幼さの残る体つきの、年齢不詳というのがしつくりくる風貌。浅黒い肌、炎のように赤い髪は後ろで束ねられ、赤みの強い金の瞳が焦つたようにリルを映す。

「姫さん、なに、敵！？ 暴漢！？」

勢い込んで訊いて来た男はしかし、この空間に害意が感じられないことに気付いて目を瞬いた。そして慌てて周囲を見回し、自分達以外に意思ある生物が存在しないことを確認して、がっくりと肩を落とす。

「あーびっくりしたー。姫さんが『緊急事態』なんて言つて滅多にないから、なんかすごいヤバい状況にでもなつたのかと……」

『寿命縮まつたつて絶対』と零す男に苦笑を漏らし、リルは口を開く。

「誤解させたみたいでごめんね、焰。でも、『すごいヤバい状況』かもしれないから出てきてもらつたの。わたしだけじゃ判断出来なくて……」

「？ 判断つて、何の？」

言いかけた男は、何か思い当たることがあつたらしく目を見開いた。それにリルは苦笑を深める。

「……、何処か、わかる？」

男は空を見、地面を見、さらに四方を見回して 最後に、何やら宙に円を描いた。その軌跡に一瞬炎が灯るが、すぐに押しつぶされたように消える。

「……【禁智帶】 アズイ・アシークだな、間違いなく」

「やつぱり……」

「少なくとも俺は、イサ精靈がうまく力が揮えなくなる場所を、他に知らない

「それにどこからどう見ても砂漠だし、ね」

アズイ・アシーク 【禁智帶】の一つであるその場所は、ありとあらゆる魔術的因素が拒絶され、その影響で砂漠化していると言われている。それはその一帯に、『外的魔力』が存在しないからだ。『外的魔力』は『魔術』や『魔法』を使う際に必要であり、また、

この世界の均衡を保つ役割をも果たしている。故に『外的魔力』の存在しない【禁智帯】は均衡が崩れ、一面の砂漠や永久凍土の地、といったふうに、生命の育たない場所となるのだ。

「……で、ここが【禁智帯】のアズイ・アシークだろうつてのはどもかくとして、なんでまたこんなとこに居るんだ？ 俺が精霊<sup>イース</sup>石<sup>イース</sup>中居る前はイースヒヤン<sup>国内</sup>テに居たよな。アズイ・アシークがあるのつて海挾んだ向こう側の大陸じゃなかつたか？」

「それが、わたしにもよくわからなくて」

「へ？」

困ったように眉根を寄せたリルは、溜息をついて話し出す。

「……実はわたし、今日十五歳になつたんだけど」

「え、マジか。俺聞いてないぞ！？ 贈り物も用意してないし！」

「言つてないもの。つていうか気にしないでいいから。……それで、兄様達が、それぞれプレゼントをくれたの」

「兄様達つて……ファレンとかセクトとかザードとかシーズのことだよな？」

「それ以外にわたしに兄様と呼べる人はいないってば。……なんていうか、状況からして、そのプレゼントが問題だつたみたいなんだけど」

言いながらリルは思い返す。

最初にリルにプレゼントを渡しに来たのは、二番目の兄であるザードだった。

いつものように満面の笑顔で、ついでに言えば飛びつかんばかりの勢いで、『誕生日おめでとうコル！』と朝一番に部屋に飛び込んできたのだ。

……寝起きにあの元氣すぎる姉は響いた……とかよつと遠い田になる。

次にリルの元を訪れたのは、四番田の兄、そしてザードの双子の弟でもあるシーズだつた。

ザードと違つて、自分の興味のあること以外には必要最低限以下の語数しか口にしないシーズは、ふらりと許可もなく部屋に入つてきた。そして何事かと田を瞬かせるリルの田の前に包まれてもいいな要素のままのプレゼントを落とし、すんでのところで受け取つた様を見る事もなく、またふらりと出て行つたのだ。

ザードが先に來ていなかつたら誕生日祝いだという事すら氣付かなかつただうつ。それほどに『祝う』といつも田氣からかけ離れていた。

そして次にリルにプレゼントを渡したのは、一番上の兄であるアレンだつた。

いつも通り、自主鍛錬中のアレンに休憩ついでの昼食を持つていつた際、『ああそعدた忘れるといつた』といつも葉と共に何気なく渡されたのだ。シーズとの違いは、きちんとプレゼント用に包装されていたところである。

……まあ、鍛錬中も持つていたせいなのか、少々、いや大分よれてしまつていたが。

最後にプレゼントを渡してきたのは、一番田の兄であるセクトだつた。

恒例となつてゐる勉強会 と言つてもリルが一方的にセクトに教わつてゐるだけなのだが の前に、『誕生日おめでとう。今年もリルの誕生を祝えて嬉しいよ』と微笑みながら差し出されたのだ。病弱ゆえ傳げな見た目とは相反した氣の強さにより、辛辣と言つても過言ではない普段からはかけ離れた態度に、毎年首を傾げるこ

となるのだが、果たして何故そんな態度なのかは今回もわからなかつた。

……ともかく、四人から渡されたプレゼントの中身を確認してみたところ、すべて装飾具だつた。

ザードが指輪、シーズが足飾り、ファレンが首飾り、セクトが耳飾り　という、示し合わせたかのような取り合せ。しかしザードを始め誰もそれらしきことを口にしなかつたので、それはないだろ？、とリルは思つたのだが。

驚くべきことに、その装飾具に使われている飾り石が　すべて同じ種類だつたのだ。

しかも、リルの知らない石だつた。セクトとの勉強やザードの旅の土産やシーズの実験等々で様々な石を見てきた己の知識にない石。何の石だろう、と気になつて、調べようとそれらを手に図書室へ向かおうとした　次の瞬間に、リルはこの砂漠に立つていた。

だから恐らく、この事象の原因是そのプレゼントなのだろうと思つたが……何故か、今それはリルの手元にない。しっかりと手に持つていたはずなのに。

こんなことになるのなら先に誰かに訊いてみればよかつた、と思つても後悔先に立たず。誰かに聞くより先に調べる癖がついてしまつていたのだから仕方がない。

それに、焰に訊いていたところでは、この現象を回避できていたかというのはわからないのだし。

事情をかいつまんでも説明したリルは、どこか考え込む風な焰をじつと見つめる。

焰は「あー」とか「うー」とか言いながら頭を搔いている。そして意を決したように話し出した。



## 【禁魔帯】と『魔界』

「あー……多分それ、【移空石】だつたんだろ」

「【移空石】?」

「空間を渡る力が込められた石つていうか、空間転移装置みたいなもん。まだ精霊<sup>イナ</sup>がごろごろしてた頃に作られたんだよ。でも随分と前から見なくなつて、てっきり使えるやつはもうなくなつたのかと思つてたんだけど……まさか姫さんの元に来ちゃうとはなー」

あちやー、とでも言いたげなその口調に、リルは首を傾げた。その言い方はまるで、リルの元に【移空石】が来ると都合<sup>ハ</sup>が悪いかのようだ。

「その……【移空石】って、わたしが持つとまづいものだつたの?」「ああ、いや、そういうわけじゃないんだけど。姫さんがつていうか、姫さんと俺が一緒だつたのがまづかつたつていうか」

「わたしと、焰?」

「そ。正確には精霊<sup>イナ</sup>石と契約者。【移空石】つてのは元々魔術師<sup>イナ</sup>が作つてたもんだからさ。使えるのも基本魔術師。でも精霊<sup>イナ</sup>石持ちつつーか精霊<sup>イナ</sup>にも使えるの。精霊<sup>イナ</sup>石持ちを通じてだけど。でもほら姫さん、『魔力因子』ないだろ?『発現因子』だけで。だから俺の力と相俟つて半端に作動しちまつたんじゃないかなー、と」

ま、憶測だけど、と締めくくつて、焰は空を見上げた。そこには相変わらず凶悪な口差しを降り注がせている太陽の姿。

「とりあえず姫さん、移動したら? 僕はともかく、姫さん生身の

人間だし。なんだっけ、なんか安全なところにあるんだろう？ アズイ・アシークにもさ

言われて、リルは頷く。

「あ、うん。シーズ兄様がザード兄様に調べさせたから えっと、  
多分こっち

シーズに頼まれて、ザードの言葉を元に地図を描き起こしたのは、  
そう昔のことではない。完璧に、とは言わないが、大まかな位置は  
覚えている。

通常目印になるようなものはここにはないが、位置による砂丘の  
形状の見分け方もザードに教わっていたため問題ない。

それを、シーズは『間隙』と呼んでいた。均衡が崩れているが故  
に生じた、世界のズレ 事象の間隙。捻りも何もあつたものでは  
ない名称ではあるが、その本質を的確に表しているとも言える。

記憶を頼りに移動し始めたリルの後ろを、焰がのんびりとついて  
いく。

そして、捜索を始めてそれほど経たず、それは見つかった。

「……あつた！」

思わず喜色の混じつた声をあげて、リルは『間隙』へと足を踏み  
入れた。

『間隙』は、本来あらわれるべき現象が正常にあらわれない場所  
である。つまりこのアズイ・アシークの場合。

「はあ、涼しい……」

周りとなんの変わりもない砂漠の真つ只中でありながら、直射日光の熱も、周囲の熱気も届かない、暑くも涼しくもない場所となるのだった。

先程まで周囲が凶悪なまでに暑かつたため、体感的には涼しく感じる。生命の危機を感じるほどでなくとも、それなりに茹だつてきていたリルは、ちょっとばかり生き返る心地だつた。焰は精霊イーサであるため、大して影響はない。

「ふーん、『間隙』ってこんななんのか。『外側』ってわけでもなく、かといって『内側』でもない 確かに『間隙』だな、これは何やら納得して頷いている焰をよそに、リルはぼんやりと今後のことについてを馳せる。

焰曰く【移空石】によつてここに来てしまつたらしいが、その【移空石】は手元にない。ということはつまり、移動手段は徒步しかない。

さらに、ここはアズイ・アシーケ 【禁智帶】だ。魔法も魔術イーサも使えない。そもそもリルはどちらも使えないのだが、

【禁智帶】ではうまくそれを揮えない。『外的魔力』がないせいであるが、もし『外的魔力』があつたとしても、砂漠では大して役に立たないだろう。焰は火の眷属だ。応用するにしても限度があるし、砂漠で炎は夜くらいにしか必要ない。

頭の中にアズイ・アシーケの全体図、そしてその周囲の地図を思い浮かべる。今居る場所は、リルの記憶が正しければアズイ・アシーケの東南部。そして最も近い国は魔法国家として名高いシャラ・

シャハル　『魔法大国』シャラ・シャハルだ。

リル自身にはシャラ・シャハルを訪れた経験は無いが、兄弟一の旅好きであるザードは幾度かそこを訪れている。なので、リルの住まうイースヒヤンティからすれば海向こうの国交のない国と言えど、まったく知識がないわけではない。

（確かに、入国審査は緩いって　国家間で指名手配でもされてない限りは入れるとかって聞いた気がするから、入国は問題ないはず。入国できればそこからザード兄様がよく使う経路で国まで帰ればいいし……問題はここからシャラ・シャハルに着くまでだけど、アズイ・アシークの端までは多分そんなにはずだし）

周囲の景色　果ての無い砂漠を見るとそんな感じはしないが、ザードによればそれは幻影のようなものらしい。【禁智帯】から一歩出れば、広がる砂漠も痛いほどに照りつける太陽もなくなるというのだから不思議なものである。

大陸の中に別空間が広がっていると考えればいい、と言つたのはシーズだつただろうか。根本的に違う空間なのだから、そういう摩訶不思議なことも起こり得るのだとか。

アズイ・アシーク　というか【禁智帯】について研究しているような物好きはシーズくらいなので、まだ解明できていないことは多かつたりする。

そもそも普通の人間はアズイ・アシークを筆頭とした【禁智帯】に足を踏み入れようとはしないし、踏み入れたら最後、抜け出すことはできないとまで言われている。普通に行つて帰つてくるザードのせいで、やはりそんな感じはしないのだが。

ともかく、当面は『間隙』を有効利用しつつ、アズイ・アシーク

を抜けたことが先決だろ？

そう結論付けて、リルは焰にその皿を広げようと口を開き、視界の隅で何かが光ったのに気付き、動きを止めた。

「……？」

ちかり、ちかりと光が瞬く。それは明らかに、砂の照り返しなどではない。

遭難者の遺品　　もとい、誰かの落し物か何かだらうかと首を傾げたりルは、目を凝らした先にあつたものに息を呑んだ。その驚きのままに『間隙』を出て駆け出す。

「え、姫さん！？」

リルの唐突な行動に遅れて反応した焰の声にも振り返らず、真つ直ぐに駆けて行つた先には。

「男の、子……？」

身体の半ばを砂に埋もれさせた、十歳ほどの少年の姿が、あつた。

とりあえず、そのままにしておくわけにもいかないので、焰の力を借りて『間隙』へと少年の身柄を移したもの。

「……目、覚まさないね」

日が傾き始める頃になつても少年は一向に目を覚ます様子が無く、リルは途方に暮れていた。

砂漠の金とは相容れない、光を喰らひ黒の髪。固く閉じられた瞳の色は見えない。幼さの残る輪郭を照らす陽は、刻一刻と色を変えしていく。

「いやでも身体に異常はないんだろ？ だつたら放つときも目を覚めるつて。姫さんがんな顔することない、ない」

「でも……」

そう言われても、異常が無いからこそ、どうして目が覚めないのかわからなくて不安なのだ。リルは正式に医学を学んだわけではないし、もしかしたら何か見落としがあるのかもしれないと思つてしまう。

『知識だけが突出していても駄目だといつことは幾らお馬鹿なお前でもわかるよね。かと言つて知識がさほど重要じゃないなどという短絡な思考に至るなんてことはないと思つているのだけど、大丈夫だろ？ 要は意識の問題だということだよ、リル。知識があつたつて出来ないこと、対処しきれないことは当然あるし、実際何か

の問題に直面した時に、己の内にある知識を適切に使用できるかは各々の器量によるということを常に意識しながら、その上でできる限り知識を蓄えるというのが、お前にできる最善なのだろうね。僕は知識をお前に教えるけれど、それを実際に使うのはお前自身でしかない。知識はお前の内に蓄えられていくだろうけど、お前は自分が平凡な人間であるという事を忘れてはいけないよ。お前は決して完璧な人間じゃなく、世に溢れる大多数の人間と同じように、記憶が薄れることも歪むこともあるはずだ。必要な知識がその場ですぐに余すところ無く正確に思い出せるなんてことは絶対にないのだからね。自分の知識を過信してはいけないし、いつでも自分の判断が裏切られる可能性を考えていかないといけない。不測の事態というものはどこにでも転がっているのだから。……まあ、それに対する方法は、僕よりもザードに教わるのが良いだろつ。あいつほど臨機応変という言葉を体現している人間は居ないだろうからね』

一番目の兄、セクトの言葉が蘇る。病弱故に殆ど部屋から出ることのできない彼は、世界中の言語に精通し、暇さえあれば書物を読んでいた。更には一度見聞きしたことは忘れないという特技から、家族間では生き字引扱いをされていたりもする。

そんなセクトに種々様々な知識を叩き込まれたリルは、勿論医学の知識だつて持つてているわけだが、まだセクトの持つ知識のごく一部しか教わっていないし、セクトと違つて絶対的な記憶力など有していない。

リルの持つ知識から判断すれば、未だ目覚めない少年の身体に異常はない。けれど、もしかしたらリルの知らない知識においては異常だと判断できる何かがあるのかもしれない。リルが覚え違いをしているのかもしれない。そもそも判断 자체が間違つてている可能性だってある。考え出したらキリがないことは、リルにだつてわかつているのだが。

詮無いことだと理解しながらも、こゝにセクトがいれば、と思つてしまつ。

田覚める様子のない少年を見下ろしながら、ぐるぐるヒロの思考に浸つていると、ふと焰が口を開いた。

「つーかさ、姫さん。ここつ、なんでこゝに屈たんだと思つ?」  
「え?」

さつきから気になつてたんだけど、と焰は少年の手首を指し示した。

「こゝの紋様、どつかで見た気がするんだよなー」

その言葉を受けて、リルも少年の手首に浮かぶ紋様を見つめる。黒い、恐らくは刺青によつて施された、手首を一周する形で精密に描かれた紋様。その形状に、リルも見覚えがあつた。

「シャラ・シャハルの王紋……?」

「あ、それだそれだ。王位<sup>スリヤ</sup>継承者に刻む王紋! えーと、これだと第二継承者か。……つてなんでシャラ・シャハルの王族がこんなところに?」

焰の疑問も尤もだつた。シャラ・シャハルの王族、しかも第二位とはいえ王位継承者が、何故ひとりでアズイ・アシークで砂に埋もれていたのか。

供らしき姿はもちろん見あたらなかつたし、それ以前に、少年の格好は明らかに砂漠向きではない。不慮の事故で飛ばされてきたりと似たり寄つたりな格好をしている。自分の意思で来たとすればよほどの考え無しだし、そうでないのならなにやら不穏なものを感

じる。

「なあ、もしかして、何かものすごく面倒なもん拾つたんじゃないの、姫さん」

「…………」

焰の言葉に、リルは沈黙で返すしかなかつた。  
たとえ事前に少年の身分がわかつていてもリルは彼を拾つただろうし、当然今から見捨てるなど出来はしないけれど面倒そなのは確かだつたからだ。

王位第一繼承者。所謂王子だ。少年がどのような性格かはわからぬが、基本的に王族なんかは一筋縄ではいかない人間が揃つてゐる、トリルは思つてゐる。あんまり突飛な性格じゃありませんように、と密かに祈るリル。

(……あれ?)

そこではた、と気がついた。

「第一繼承者?」

「へ?」

「この子、第一繼承者なの?」

「そうだけど。……ほら、ここ。この紋様が『一番田』って意味。

ちなみにこいついう紋様だと『一番田』」

言いながら宙に紋様を描く焰。焰がどれだけ長い間存在しているか、そしてその間に培われた知識の豊富さを知つてゐるリルは、焰が真実を言つてゐるのだと頭では理解しながらも信じられなかつた否、信じたくなかった。

何故なら、それは在り得ないことだったからだ。

「第一「継承者」……【加護印】<sup>シャーン</sup>持ちの王……」

空を見る。未だ陽は完全に沈んでいないが、宵闇が空を刻々と塗り替えていつている。もうしばらくすれば、陽の光ではなく月の光が世界を照らすようになる。そうすれば、リルの考えが正しいのか否か、はっきりするはずだ。

「……姫さん？」

リルの様子がおかしいのに気付いた焰が気遣わしげに声をかけるが、リルは少年の額を見つめたまま動かない。

そして、月明かりが少年を照らした。

## 捨いものの正体

リルがはつと息を呑む。焰も目を見開いた。

少年の額、その中に、淡く輝く印を見たために。

「【加護印】…………じゃあ、やつぱり」

「…………今のシャラ・シャハルに【加護印】持ちは、ひとりのはずじやなかつたか？」

「うん、ひとり。【加護印】持ちは王、アル＝ラシード・リュ

ーン・シャン＝シャハラ、だけ」

「じゃあ、こいつは…………存在を隠された【加護印】持ちはアル＝ラシード王本人、だ

と思う」

「本人って、アル＝ラシードがこんなちびっこのはずないだろ？」

アル＝ラシード・リューン・シャン＝シャハラ。【加護印】と呼ばれる、シャラ・シャハルでは特別な意味がある印を持つ王。

【加護印】とは、シャラ・シャハルの初代王がその身に宿していった精靈の加護が顯れたものだと言わわれている。本来あるはずのない人と精靈との間の子であつたために。

その真偽は未だ不明だが、シャラ・シャハル王家に【加護印】を持つて生まれる者が居るのは確かである。建国から五百年近い歴史の中で、確認されているのは初代王を除いて三人だけだが。

そしてそのひとりがアル＝ラシード・リューン・シャン＝シャハ

ラ 初代王以外で初めて、【加護印】<sup>シャーン</sup>持ちで王になつた男だ。

そして同時に、兄弟殺しの王としても有名だつた。

本来王位を継ぐはずだつたのは、彼の異腹の兄だつた。

シャラ・シャハルでは、能力や母親の身分に関係なく、前王の血を引く男児に王位継承権が与えられる。それは年齢が高いものから順に第一位、第二位、第三位……と定められ、王家にのみ伝わる特殊な刺青で肌に刻まれる。先程焰が確認したのがそれだ。

王位継承順の高い者が死ぬか、何らかの理由で王位継承を辞退しない限り

これには前王の承認が必要なのだが 低い者が王位を継承することはない。それに例外はなく、過去には事故により意識不明になつた者ですら、王位を継いだといつ。

その決まりがあつたために、アル＝ラシードが王になる可能性はないに等しかつた。第一王位継承者だつた人物はアル＝ラシードより十以上年上であり、学問にも武術にも秀で、前王の覚えもめでたく、身体も健康そのもので 誰もが彼の即位を疑つていなかつた。

しかし彼は、即位の直前に自殺をしたのだといつ。側近をすべて斬り捨てたあと、宮に火を放つて。

何故彼がそんなことをしたのか それは残された誰にもわからなかつた。わからないまま、王位は継承権第二位を保持するアル＝ラシードへと継がれることになつた。

何ら問題のなかつた次期王の、突然の蛮行。宮に火が放たれ、彼の側近もまた死したために、詳しい事情は何一つ明らかにされることがなく。

それを不審に思った民たちは、いつしかアル＝ラシードが彼を死に追いやつたのではないか、と噂するようになつた。

王宮内でさえ囁かれているといつそんの噂に気付いていないはずはないだらう那人は、それについてはただ黙して語らす。

故に、流言飛語と一笑に付されるべきその憶測は、早すぎると「アル＝ラシードの即位とともに諸国へと広まつて 今ではほとんど事実のようにな語られている。もちろん、公にではないが。

「ただの【加護印】持ちなら、秘された存在つて考えるのが妥当だけど 第一王位繼承者の印があるなら別。それに、今までに【加護印】持ちの第一王位繼承者はいないの。【加護印】はもちろん、王紋にも細工はきかないから、この子が『アル＝ラシード・リューン・シャン＝シャハラ』だつて考えるのが理にかなつてゐると思つ。ありえないって思つけど……」

「 そつ、この子供がアル＝ラシード・リューン・シャン＝シャハラであるはずはないのだ。

何故なら彼は リルの記憶が正しければ、二十を過ぎた青年のはずなのだから。

第一王位繼承者が死んだのは十年前。そのときアル＝ラシードは十を過ぎたばかりの子供だった。

そして彼の即位はその五年後。シャラ・シャハルにおいて成人と認められてすぐのことだった。

彼の治世は既に五年を経過してゐる。つまり、少なくとも二十歳は超えているのだ。依然として目を覚ます様子のない少年は、ビックリする見ても二十過ぎには見えない。

その事実が示すことをリルは出来れば否定したかったが、否定す

るだけの材料はなかつた。

更に、同じ考えに至つたらじい焰が、せりつとそれを口にさる。

「ハフー！ とは、なに？ もしかして俺と姫さん、過去にこじるつてこと？」

言葉にすると尙更信じがたい、常軌を逸した出来事だが、残念ながらそういう考えるのが一番理に適つていた。

「可能性としては、それが一番高いと思つ。【禁智帶】は空間が不安定だから、そういうことも起こりうるかもしれないってシーズ兄様が言つてたし。それに、【移空石】が何か変なふうに反応を起こした可能性もあると思つ。そういう現象を拒絶するはずのアズイ・アシークに出たつてだけで、結構ありえないことでしょう。」「……そういえばそうか。【移空石】があつた頃には【禁智帶】もなかつたしな……そういうアントニアモなことが起つてもおかしくはないってか」

「この子の田が覚めれば、その辺つもまづきつすると想つただけど」

少なくとも、彼が何者か 本当にアーラル＝ラシードなのか、それ以外の人物か はわかるだろつ。それがわかれば、過去に来たのではないかといふ仮説が合つてこいるか否かもわかる。

「しつかし、気持ちよさでーに寝てんな、こいつ。もうこつそ無理やり起こすつてのはどうだ？」

「いやでも、そんな切羽詰つてゐわけじゃないし……」

「や、姫さんはもうちょっと焦るべきだと思つぞ、俺。いきなりアズイ・アシークに飛ばされた、とか、もしかしたら過去に来ちゃつたかも、とかにしては姫さん落ち着きすぎだし」

焰の言葉に思わず苦笑するリル。実際のところ、まだ色々と実感がないせいだと思うのだが、外から見れば『落ち着いている』ように見えるらしい。そうあるように見えたり見えたように努めている、とこうのもあるのだ。

『冷静さを欠くような状況でこそ、落ち着かないとダメだよ、リル。内心大混乱だろ？』と、わけがわからない状況だろ？』と、ひとまず落ち着くように意識すること。混乱してるとかつて理解できる時点である程度余裕があるんだから、そんなに難しいことじゃないよ。本当にどうしようもなく冷静さが欠片も無くなってるなら、自分を客観的に見られもしないしね。だから、少しでも自分の状況を客観的に見られる状態なら、『落ち着くこと』を最優先にして。別に、本当に『落ち着く』までいかなくてもいい。フリでもハッタリでもいいから、『そう見える』程度まで取り繕うんだ。そうすれば頭も通常程度には働くようになるはずだよ。そうすれば大抵のことはどうにかなるよ。なんたってリルは僕らの自慢の妹だからね！』

ザードの言葉を思い出して、自然と笑みが零れる。それに少しだけ不思議そうな顔をした焰は、けれどそれについては何も言わず、ちらりと起きる様子のない少年に視線を向けた。

『ま、姫さんが無理やり起こしたくないって言つなら俺はそれでいいけどさ。でもアズイ・アシークを抜けるには、夜のほうがいいだろ？』

確かに太陽が力一杯照っている昼間よりは、夜のほうが移動に向いている。普通ならば夜は夜で気温が下がりすぎて移動には向かないが、リルには焰がいる。凍えないようにするくらいは精霊イサにはお手の物だ。

「……じゃあ、満月になつても日が覚めなかつたら、起きないからおかしい」

アズイ・アシークでは、月は一晩で満ちて欠けるといつ。実際、先程まで細い三田月だつたのが、だんだんと半月に近づいている。ザードに聞いてはいたものの、実際に見てみると異様な光景だ。

ともかく、幾度もアズイ・アシークに訪れているザードによれば、この月は陽が沈んでから再び昇る、そのちょうど真ん中の時間に満月になるらしい。時間が計りやすくて便利そつだな、と、リルはちよつとずれた感想を抱いた。

「了解。……じゃ、姫さんは休んでるよ。意識してないと思つけど、疲れてるだろうじ。今夜移動始めるかもしれないんだつたら、尚更無理にでも寝といた方がいいと思つぜ？もし姫さんが寝てる間に少年の日が覚めたら、ちゃんと起いすかうわ」

「うひ、わかつた。よろしくね、焰」  
「任せとけつて。じゃ、おやすみ、姫さん」

「おやすみなわい」

自覚はまったくなかつたものの、やはり疲れていたのだろう。リルは横になつてそう経たないうちに意識を手放したのだった。

## 懐かしい夢

「……ザードにこわが」

小さな少女が、今にも泣き出しそうな顔をして、扉の陰から姿を現した。

「んん？ どうしたの、リル」

部屋で荷造りをしていた少年は内心驚き とこつよつ焦りつつも、普段通りの声音で言葉を返す。

「こいつが、たびにでるのでしょうか？」

「うん。今度はねー、北の方に行くんだ！ お土産は万年雪から採れるつてこいつ結晶とかどうかなつて思つてるんだけど」

「わたしも、」

「え？」

「わたしも、つれていくて、ぐだぐだ」

「えええええ！」

「どちらつまででも、いいです、から」

「ええ、いや、ちょっと、待つて？…」

少年はあまりのことに思考が停止した。何事にも柔軟に、臨機応変に対応できることが特技の域に達している少年にとってはほとんど生まれて初めてのことだった。

血りを落ち着けるために幾度か深呼吸して、少年は少女に尋ねる。

「えーと、リル？ また、なんでそんなこと言い出したの？ 旅は

もつと大きくなつてからだつて父さんに言われたよね？」

だって、と少女はぽつりと零した。

「わたし、といつれもとかねれどのじぶんがじやなこつにあこたたわました。だから、でてこかなくひがや、つて」

その言葉を聞いた瞬間、少年は視線を鋭くした。

「……それ、誰に聞いたの？」

「あー、もうあの馬鹿！ 考えなし！ 情緒欠乏の人間！－！」

名前だけで大体の事のあらましが理解できた少年は、思いつきり元凶の人物を罵倒した。

「どうせ何も考えずにぺろっと言つたんだろうけど　聞いたリル  
がどう思つがぐらに予測しやつての。……いい？　リル」

少女に田線を合わせるよひこじやがみこみ、少年は優しく言い聞かせる声音で続ける。

「確かにリルは父さんと母さんの子供じゃないし、僕たちと血が繋がってない。でも、リルが僕たちの大切な妹だつていうのは間違いないんだ。だから出て行こうなんて考えないこと。あと、敬語もいらないからね。今まで通りの喋り方でいいんだよ」

「でも、これまたひどいもんがへりであります」

「そうだね、王族だ。この国じゃ身分なんてあつて無いようなものだけど。まったく、セクト兄もがつちがちに知識教え込まなきやいいのに。型にはまつた考え方ばかり教えてるから」ついこうになるとなるんだよ。あとで非難してやる」

ひとしきりぶつぶつと呟いて、少年は再び少女に向き直る。

「王族だから敬わないと、つて考えるのは、まあ仕方ないよ。リルはそういう風に教わったもんね。でも、言つたよね。リルは僕たちの大切な妹だ。その妹に 家族に敬語を遣われるなんて、僕はいやだよ。それに、身分で言つならリルだって王族だ。『お姫様』なんだから」

「でも、わたし、どうせまとかあさまの『どもじや、ない……』

「だーかーらー！ 血なんて関係ないの！ 父さんも母さんもリルを娘だつて思つてるし、実際そうなの！ 僕たちだつて血は繋がつてなくともリルの兄なのつ！だからリルは僕たちの家族なの！ 王族なの……！」

「で、でも……」

尚も言い募ろうとする少女の手を、少年はがつしり掴んだ。そしてそのまま歩き出す。

「よしわかつた。リル、今から広間にみんな集めるよ。リルのことだつて言えばすぐ集まるだろうし。で、今の話みんなにする。絶対みんな反対するだろうね。ていうか怒る。ファレン兄とか泣くんじやないの？ そんなに俺たちから離れたいのかー、とかつて。それに、元凶にはきつちり責任とつてもらわないとだし」

手を牽かれる少女は、少年の言葉の意味がよく理解できず戸惑いながらも、握られた手のあたたかさに、何故だか少し安心したのだ

つ  
た。

リルが田を覚ましたのは、満月まであと僅かもない頃だった。

（……なんかすこく懐かしい夢、見てたなあ）

ゆつくりと身体を起こしながら夢の内容を思い返す。

幼い日、自分が兄たちと血が繋がってないことを知つて、彼らと共に居てはいけないと考えた。 短絡的にも程があるが、その頃のリルは血の繋がった家族以外は家族でないと思つていたのだから仕方がない。

それに、王家には血筋が重要だと教えられた直後だつたのも大きかった。血によつて連綿と続いてきたものに、自分という異分子が入り込んではいけないと 恐怖にも似た思いを抱いたのだ。

その後の騒ぎで、その思いはほとんど消えたのだけれど なんせ、一部は『何でそんなこと言つんだリル！ そんなに俺達が嫌いなのか！』 一緒に住みたくないのか！？』と詰め寄つた拳句に泣き出すし、一部は『何をどうしたらそんな考えに至るのかまったくもつて理解不能だけど、どうしてもと言つんだつたら僕も共に国を出ようかな。少なくともお前は小さすぎて一人で生活なんてできないし、というか死にそعدだし』なんてリル以前に自分が死にかねないだらうことを言つてくるし、一部は『あらあらあら、それならいっそ王制廃止しちゃつたらどうかしら』なんて軽く言つしで、気付けば城内が上へ下への大騒ぎになつていたのだ。

王制廃止の法案作りまでされていたのだと後から聞いて血の気が引いたのも今では良い思い出だ。本気ではなかつたとはいえ、やりすぎだとは思うが。

「おはよ、姫さん。夜だけ。……少年はまだ寝てるよ。何回か起きそつな感じにはなつたんだけど」

「わづ……」

リルが目を覚ましたのに気付いたらしい焰が、のんびりした声音で報告してくるのに頷く。

自力で目覚めた時点で予想はしていたが、やはり少年はまだ目覚めていないうらしい。しかし目覚めの兆候があつたのなら良かつた。このままずっと目覚めないと事態は回避できそうだ。

小さく伸びをして体をほぐし、少年に近づいてみる。気配を感じたのか何なのか、僅かに少年が眉根を寄せた。

「確かにもうすぐ目が覚めそうな感じ」

言いかけたリルは、覗き込んだ少年の目がぱちりと開かれたことに驚いて言葉を切った。

「…………」

「…………」

「…………」

そのまま無言で見つめ合つ。束の間の沈黙。

いち早く奇妙な硬直状態を解いたのは、少年の方だった。

「つ、何者だ……」

言葉と共に懐から取り出され、リルに突きつけられたのは、月光に鈍く光る短剣だった。

「うわ、あつぶねー オコサマだな」

それがリルに届く前に、ひょいと焰が手を割り込ませる。短剣は焰の掌を貫通 するかのように見えた瞬間に、刃の部分がどろりと溶けた。

「 つ！？」

言葉を失くし、息を呑む少年。そんな彼に、リルは困ったような笑みを向けた。

「ええつと……とりあえず、君を害しないっていう証拠はないわけ  
いてもらえないかな」

「何を……」

「怪しいのは重々承知だし、君を害しないっていう証拠はないわけ  
だけど、話ぐらい聞いてくれないとこつちも困る」

「 ……」

少年は柄だけが残つた短剣とリルの顔とを交互に見、しばらくの後に、警戒を解かないまま口を開いた。

「 ……お前は何だ」

「何、って言われて も……」

「確かにお前に私を害するつもりはないようだ。殺氣も感じられないし、そもそもお前に緊張がない。かといって他人を害することに慣れた類の人間であるようには見えない。 しかし、今、お前に向けた刃が溶けた。お前からは魔力を感じない。魔法士ではないのに、何故そのような芸当ができる

少年の問いに、リルは傍に立つ焰を見た。焰もリルを見返す。

精靈イーザである焰は、基本的に契約者以外の目に見えない。もちろん声も聞こえないため、少年にはリルが何かをして刃を溶かしたのだと思われたらしかつた。

答えを返さないリルに、少年は視線をちらりと鋭くする。

「答えられないのか」

「そういうわけじゃないんだけど……」

『お前は何だ』という問いには『ただの人間です』としか答えられないのだが、少年が知りたいのはそういうことではないだろう。かと言って焰の姿が見えない状態で、精靈石イース持ちだと言つても信じてもらえるとは思えない。

精靈石イースも精靈イーザも今やお伽噺の中の代物である。リルが契約者となつたのも、偶然に偶然が重なつた結果である。恐らく、リル以外の精靈石イース持ちは現代には存在しないはずだ。

(焰のことは、できる限り人に知られない方が良いんだけど……でも上手い言い訳つていうかごまかし方も思いつかないし。あんまり聞を空けると、この子ももつと不審に思うだらうじ)

リルは数秒悩んだものの、最終的に「もつなるよつになれ」と色々諦めることにした。

(まあ、焰のことだけなら何とかなるだらうじ。精靈石イースも精靈イーザも、実際に存在してたつてことは証明されてるんだから信じてもうえはずだし……)

傍らに立つたままの焰に再び視線を向け、名前を呼ぶ。

「焰

「わかつてゐるつて」

苦笑いしつつ、焰が精靈石に触れる。精靈石<sup>イース</sup>が明滅を繰り返し、焰の足元に赤く発光する陣が浮かび上がる。

焰の全身を炎が包み込んだ。魂が奪われるかのよつた鮮やかな炎。それは数秒もしない内に唐突に消え、そこに残つたのは、炎に包まれる前と何ら変わりない焰の姿。しかし、外見上は何も変わらずとも、決定的に違う点がひとつあつた。

「……お前、どこから現れた……！」

少年が焰を見、顔色を変えて叫ぶ。……そう、契約者以外にも見えるよう、実体化したのだ。

「どこからつて、最初つから居たんだけどな。あんたに見えてなかつただけで」

「何だと？」

「俺は精靈<sup>イーサ</sup>でね。あんたがリルに突きつけた物騒なもん溶かしたのは俺だ。問答無用で他人に刃向けるなよなー？ 危ないつての」

「精靈<sup>イーサ</sup>……？」

少年の表情に驚愕と疑惑の色が混じる。それも当然のことではあるのだが、このままでは話が進まないので、リルは精靈石<sup>イース</sup>のはまつた腕輪を外して少年に向かつて差し出した。

「さつきの言い方からすると、君、魔法士でしょう？ だつたらこ

れ見れば精靈石<sup>イース</sup>だつてわかるんじやないかな

少年は恐る恐る腕輪に触れた。赤い精靈石<sup>イース</sup>の表面を撫でるようにして、眉間の皺を深める。

言葉遣いといい、その表情といい、子供らしくないといふか、大人びすぎているといふか、見た目とそぐわないなあ、とリルは思った。

しばらく精靈石<sup>イース</sup>を観察していた少年は、なるほど、と溜息と共に呟いた。

「信じ難いが、確かにこれは精靈石<sup>イース</sup>のようだ。これほどまでに高密度な魔力結晶は見たことがないし、精靈<sup>イーサ</sup>以外に何もないところから現れるなどということができる存在を、私は知らない。だが、それなら余計にお前が何者かわからない。古の記録によれば、精靈石<sup>イース</sup>を持つてるのは魔術師のみのはずだ。だが、お前からは魔力を感じない。魔術師であるはずがない。……もう一度問う。お前は何だ？」

そういえばそうだった、と、そのことをすっかり忘れていたリルは内心焦つた。そもそも魔術師ですら現在はほとんどいないのだ。余計に不審極まりない。

実際は、『発現因子』さえ持つていれば、魔術師でなくとも精靈<sup>イース</sup>石持ちになることはできる。いくつか条件が必要ではあるが。しかしそれは、リルの住む国・イースヒヤンデにしか知られていない。

一般に認識されている個人の『魔力』が『魔力因子』と『発現因子』の組み合わせによって現れるのだといふことも、イースヒヤンデ以外には知られていないのだ。それを一から説明するのは骨が折れる。その理論を組み立てたシーズならばともかく。

リルはどう説明しようか悩み 結局、説明そのものを放棄することを選択した。

「ちょっと偶然が重なって精霊イース石持ちにならざるを得なかつただけの、普通の人間だよ。怪しいけど怪しい者じゃないから」

我ながら意味がわからない、と思いながらリルはそれをごまかすよつこへらりと笑つた。

「…………」

少年はじつとリルを見つめる。ますます眉間の皺が深くなり、痕が残つちゃつたりしないだらうか、とリルは変な心配をした。

「……嘘は、ついていないようだな。わかつた、信じよつ」

少年の言葉に、リルはほつと息をつく。しかし、王族（多分）がそんな簡単に正体不明の人間の言い分を信じて大丈夫なんだろうか、とも思った。

それとも自分があんまりにもどうぞうだとか間抜けそうだとか、そんな感じに見えるのだろうか、とまで考えたところで、少年が周囲を見回し絶句しているのに気付いた。

「…………」は、どこだ

「え、ええつと……アズイ・アシーク って言つてわかる?」

「アズイ・アシークだと!？」

叫ぶような少年の声に思わず肩が跳ねる。ちょっと頭に響いた。

「『金の砂に埋もれた大地』 確かに文献と一致してはいるが……」

足元の砂を手で掬い、何事かぶつぶつと呟いた少年は、「しかし」と言葉を続けた。

「…………」がアズイ・アシークならば、夜は極寒の地に

言いかけたところで、少年は何かに気が付いたよつと窓を見た。  
そこに煌々と照る満月に顔色を変え、己の額を隠すよつと手で庇う。

「…………」

またも奇妙な沈黙が降りる。

ちなみに焰は暇そつと宙を見てぼんやりしていた。わりといつもの事ではあるのだが、じついう時くらい真面目っぽく振舞ってくれ

ても腹は当たらないのでは、トリルとしては思つたりする。

「……えっと、その、それ、【加護印】だよね？」

じつはじう確かめねばならなかつたのだ。リルは意を決して尋ねる。

少年は額を噛み締め、ほとんど睨むようにリルを見つめ 搾り出すような聲音で「……そうだ」と頷いた。

「名前、聞いてもいいかな。 あ、わたしはリルっていうんだけど」

「これが【加護印】だと知つてゐるのなら、聞くまでもなくわかつてゐるのではないか」

「いや、……一応、確認みたいな感じで」

またもへりつと笑つたリルに何を思つたのか、少年は額を隠していた手をどけて、溜息をつく。

……この子、溜息のつき方が堂に入つてゐるなあ、とリルは思つた。十歳前後の外見からするところのすごい違和感だが。

「 アル＝ラシード。アル＝ラシード・リューン・シャン＝シャハラだ」

（ああ、やっぱ……）

もしかしたら自分の仮説が間違つてゐるかもしれない、と淡い期待を持っていたリルは、微妙に打ちのめされた氣分だつた。しかしそれを表に出すことはせず、さらに問い合わせを重ねる。

「……シャラ・シャハルの第一王位継承者の？」

「ああ」

名前を言つたことで何か吹つ切れたのか、あつさりと少年は肯定する。

（せめてちょっとくらい言い済つて欲しかつた……）

少年は何も知らないとはいへ、追い討ちをかけられた氣分だつた。とはいへ、少年が言い済つたところで根本的には何も変わらないのだが。

「ちなみに、今、何歳？」

「……何故そんなことまで訊く？」

「えつと、ちょっと気になつて。あ、わたしは十五なんだけど」

「……先日、十を数えたところだ」

「……そ、そつか……」

（これは、確實に過去つてことだよね……だとしたら、どうやって帰ればいいんだろう。アズイ・アシーク抜けてイースヒヤンデに帰つても、時代が違つたら意味がないし）

そもそもこの時代の自分はどうなつているのだろう。

以前シリーズが時空のねじれによつて同一人物が同時代に存在した場合の影響について論文を書こうとしたが、資料がなさ過ぎて結局完成しなかつたのだ。仮説でいいから聞いておくんだつた。

……まあ、今更後悔しても仕方がない。自分がこんな状況に置かれるとは予測できなかつたのだし。気持ちを切り替えて、リルは少年に向き直つた。

「ここがアズイ・アシークだつて知らなかつたみたいだけど、だつ

たらどうしてここに居たの？ 君、わたしが見つけたときは砂に埋もれてたんだよ？」

「それは……」

少年 アル＝ラシードは田を伏せた。歯切れ悪く、ぽつりぽつりと言葉を紡ぐ。

「私にもよくわからない。……自分自身の意思で来たのではないのは間違いないが、意識を失う前の記憶がはつきりしないんだ」

「……思い出せる最後の記憶は？」

「夕食を終えて、部屋に戻ったところまでだ。……これは一服盛られたと考えるべきか」

さらりと言われた内容に引っ掛けを感じて、リルは首を傾げた。見た田はどこからどう見ても子供でしかないのに、当然のように一服盛られたなどと言つたのもつっこみたいが、それ以前に。

「夕食？」

「ああ。……どうした？」

「夕食って言うからには、覚えてるのって夜だよね？」

「そうだが……」

「……ええ？」

混乱に、ちょっと頭を抱える。怪訝そうにアル＝ラシードが視線を向けてくるが、それどころではない。

リルがアズイ・アシークに『過去』に跳ぶ前に居た、リルにとっての『現代』の時刻は夕方だった。

そして、跳んだ先はどう考えても昼間であり、リルがアル＝ラシードを見つけたのは、太陽の様子からして昼を少し回った頃だったはずだ。つまり、アル＝ラシードは夜に意識を失つてから昼過ぎま

での間にアズイ・アシークに連れてこられたことになる。

ついでに言えば、跳んだ直後にリルが立っていた場所から、アル『ラシードが倒れていた場所まではそう離れていない。誰かがいれば絶対に気付くような距離だ。

だが、アル『ラシード以外の人影をリルは見ていない。

ならば、彼は結構な時間あの場所に居たはずなのに……。

「普通に元気そうなのは何で……？」

おかしい。おかしすぎる。

リルが診た限り、熱による異常もなかつたし、脱水症状も起つていなかつた。思い返せば日除けすら被つていなかつたというのに、それは普通ありえない。

「何のことだ？」

またも眉間に皺を寄せた少年に、リルは簡単に自分の抱いた疑問を説明する。

すると、彼は怪訝そうな顔をするでもなく「ああ」と軽く頷いた。

「それは【加護印】<sup>シャーラン</sup>のせいだろう。『加護』が現れる条件はさつぱりだが、今までにも幾度かこういうことはあった。永久的に、絶対的に、というわけではないらしいが、これは私を護る」

「そりなんだ……」

【加護印】<sup>シャーラン</sup>はシャラ・シャハル王家にしか現れない。しかも過去の事例もほとんどないので、リルもそれがどういうものかはよく知らないのだ。

……シーズ兄様に話したら、アル『ラシードを拉致してでも研究したがるだろうな、と思ったのは秘密である。

「ところで、お前はビーハーに面したんだ。アズイ・アシーケに自ら足を踏み入れるなどといふ、自殺行為に等しい愚を冒すようこそ見えないが」

「ああ、それは、その、」

純粹に疑問に思つたらしいアル＝ラシードの問いに歯切れ悪く返事をしつつ、リルは高速で頭を働かせる。

本当のところを告げたとしても、普通に考えて信じられないだろう ところが怪しさが増すだけだ。【移空石】なんて絶対知らないだらう ところが怪しさが増すだけだ。【移空石】なんて絶対知らないだらう そもそも実物も手元にない。作り話だと思われるのが関の山だらう。

「わたしの兄様が【禁智帶】の研究をしているの。それでちょっと頼まれて調査に来てて」

結局、ザードが【禁智帶】で人に会つたとき 　といふが行き倒れを助ける際に使うといふ言い訳を口にした。

怪しさの点ではどちらも同じようなものかもしれないが、まだ信憑性がある……気がする。

「【禁智帶】の研究を？ そんな話、聞いたことがないが」「地図にも載つてないような国に住んでるし、兄様、学会とかにも興味ないから。知らなくても当然だと思つ」

リルの言葉の真偽を見極めようとするかのよひ、アル＝ラシードは目を眇めたが 納得したのかそうでないのか、「せうか」とだけ呟いて視線が外された。

本当に年齢に見合わない仕草をする子だなあ、と、思いつつ、気付かれないようにほつと息をつくリル。

「 その、兄の要請でここに来たというのなら、お前はアズイ・アシークを抜ける方法を知っているんだな？」

「うん、一応。確実に抜けることはできるよ」

「ならば、私も共に連れて行つてはもらえないか。私ひとりではここを抜けることはできない」

「え、い、いいけど……」

予想外の申し出に目を丸くする。言われなくともアズイ・アシークを抜けるまでは行動を共にしてもらうつもりだったが、まさか相手から請われるとは。

いや、人としては当然かもしれないのだが、王族としての矜持とかそういうのがあつたりするのではないかと思つていたのだ。ちょっと偏見入つてたかな、と反省するリル。

「私は自分の宮からほとんど出たことがない。知識の大部分も書物からのものだ。アズイ・アシークについては何も知らないに等しい。行動の指針は全面的にお前に任せよう よろしく頼む」

「い、こちらこそよろしく……？」

そんなやりとりをする二人を見ていた焰が、何で疑問形なんだよ、と呆れたように呟いた。

「それじゃあ、えっと アル＝ラシーード」

一応彼が王族である（しかも後に王となる人物である）ことがほぼ確定したため、呼び方に一瞬悩んだものの、今更畏まつた喋り方をするつもりはリルにはない。

どうしても『王族』というより『年下の男の子』とこいつぶつに意識してしまうのだ。なので、ひとまず自分の好きなように呼ぶことにする。

「アズイ・アシークをどう抜けるかとか、あとアズイ・アシーク内を移動するときの注意みたいなのも、一応説明しつゝかと思つんだけど……」

どうしても嫌だとか不快だとか言われたときはアル＝ラシーードの希望通りに呼ぼう、と考えて、話を切り出しつつ反応を窺つてみたのだが。

「……？」

アル＝ラシーードは真顔でリルを見たまま固まっていた。雰囲気的に嫌がつてるとかそういう感じではなさそうなのだが、無言でいられるのも居心地が悪い。というか気になる。

「どうかした？」

訊ねてみると、アル＝ラシードはやつと硬直がとけたように肩の力を抜き、リルから視線を外して小さく息を吐いた。

「いや……血縁以外に敬称を付けずに呼ばれるのは初めてだつたら、少し……驚いた、のだつ。自分でもよくわからないのだが、多分」

本当に自分でわからないうらしく、首を捻りながらアル＝ラシードが言つ。

「嫌だつたら、呼び方変えるけど……」

一応真名である『ラシード』のみでは呼ばずに、準名の『アル』も添えて呼んだのだが、よく考えなくても彼とは会つて間もないのだ。さすがに馴れ馴れしそぎたかな、と心配になるリル。

シャラ・シャハルの名は少し独特で、準名・真名・守護名、そして出身、もしくは所属名で構成される。他国における『名前』にあたるのが準名と真名であり、準名のみか準名と真名を合わせて呼ぶのが通常だ。真名のみで呼ぶのは特に親しい間柄の場合であり、家族や恋人間が基本である。

リルの認識では『アル＝ラシード』が『名前』だったため、準名と真名を合わせて呼んだのだが、あえて王族を敬称無し、且つ名前で呼ぶのなら、準名の『アル』のみの方がこの場では正しい呼び方だつたことに遅ればせながら気付いた。

それゆえのリルの言葉に、しかしアル＝ラシードは即座に首を横に振つた。

「いや、構わない。呼ばれ方にこだわりはない　　といふかこだわ

るほど呼ばれたことはないし、好きなよつて呼んでくれてい。」

「ただ、少し気になつたのだが」

「？」

「お前は、私の身分に対しても畏まることはないのだな」

ただ事実を確認するよつて しかしどこか感心するよつてな響きで紡がれたアル＝ラシードの言葉に、リルはきょとんと目を瞬かせた。

（畏まる……）

確かにリルはアル＝ラシードに対しても畏つたり畏まつたりするような態度をとらないし、そうしようとも思わない。

アル＝ラシードを、王族というよりはただの少年として認識していることもあるが、そもそもリルはシャラ・シャハルの民ではない。話くらいは聞いたことがあるが、遠い海向こうの、恐らく一生目にすることもないだろうと思つていた異国の人物を目の前にして、いきなり敬意や畏怖を抱くはずもなく。

更に言えば、大変に小さな国ではあるが、故国であるイースヒヤンデにおいて、リルは一応王族の末席に名を連ねている。イースヒヤンデは身分などあつてないよつてな国ではあるが、曲がりなりにも敬われる側の人間に属しているところもあるのだらう。

その辺りのことを言つべきかとリルは一瞬考えたが、『異国民だから』とか『一応王族だから』などと言つてしまえば、どこの國の者かというのは絶対に訊ねられてしまつだらう。それはリルにとってとても都合が悪い。

大陸自体が違うため、『まかせる可能性はあるものの そんないちかばちかの賭けのよつたことをあえてしようとは思わない。

「ああ、わたしもいつのあんまり気にしない方だし……つていつか実感が湧かないっていうのもあるんじゃないかな」

なので、全くの嘘ではないがそれが全てではない言葉を口にする。どうやらアル＝ラシードは身分にこだわるタイプではなさそうな気がするので、別にこの理由だけでも大丈夫だろう。

「そうか。それもそうだな」

案の定、アル＝ラシードはあつむつと頷いた。それを確認して、気付かれないように小さく息をつく。

（何て言つても『魔法大国』だし、できる限り隠したほうがいいよね。どれくらい記録が残ってるかはわからないけど……何がきつかけになるかわからないし）

イースヒヤンデについては出来うる限り伏せなければ。伝承のようになんかやふやな存在のままにしなければ。

『古国イースヒヤン』は忘れられたままいい。呪、そうでなくてはならない。

それがイースヒヤンデの王家、ひいては民の総意なのだから。過去を繰り返すまいと、古の時にイースヒヤンデが選んだ道なのだから。

「……？ どうかしたのか」

声をかけられて、リルは自分がいつの間にか考え込んでいたことに気付いた。無言なのを訝ったのか、アル＝ラシードが顔を覗き込んでいる。

「あ……ううん、何でもない。それで、アズイ・アシーケをどうやって抜けるかなんだけど」

言いながら、リルは砂地に大雑把な地図を描く。

「わたしたちが今居るのがこの辺り。アズイ・アシーケには遮蔽物とか基本的にはないし、方角もわかつてゐるから、最短距離でアズイ・アシーケの端まで向かうつもり。で、見ればわかると思うんだけど、シラ・シハルが一番近いの。今からだつたら夜が明けるまでにアズイ・アシーケを抜けて国境まで行けると思うから、君が大丈夫なら出発しちゃいたいんだけど」

「なるほど……了解した。だが、アズイ・アシーケの夜は寒さが厳しいと」

そこまで言つて、アル＝ラシードは眉間に皺を寄せた。

「そうだ、先程も思つたのだが、何故寒くないんだ。文献が間違つていたということか？」

問われ、リルは慌てて首を振る。そういうえば先程、【加護印】やアル＝ラシードの素性について話す前にも、彼はそれを口にしていたのだった。

「アズイ・アシーケの夜が極寒だつていうのは間違つてないよ。ただ、今居る場所だけちょっと例外で」

「例外？」

「シーズ兄様は、……あ、【禁智帶】の研究をしてる兄様のことなんだけど。シーズ兄様は『間隙』つて呼んでる。何て言えばいいかな、起こるはずの事象が拒絶される地帯……」いつ、寒さとか暑さ

とか全部ひつくるめて『何もない』状態になる場所があるの。わたしたちが今居るのがそこだから暑くも寒くもないだけで、『間隙』を出たら文献通りの寒さのはずだよ』

「『間隙』……起こるはずの事象が拒絶される……？」

リルの説明にますます眉間の皺を深め、ぶつぶつと呟くアル＝ラシード。その様子を見て、言わない方が良かつたかな、と少し不安になるリル。

別に、『間隙』から出でからの体感気温を一定に保つことなど、焰の力をもつてすれば容易いことだし、アル＝ラシードにとつて未知の知識。それこそ信じられるかもわからないような内容を説明して、アル＝ラシードが自分に対して感じているだろう怪しさとかその他諸々を増幅するのはリルの本意ではない。

けれど、ここで『文献が間違っていた』といつことにしてしまつと、アル＝ラシードに嘘を教えることになつてしまつ。

そうすると、無いと願いたいものの、再びアル＝ラシードがアズイ・アシーケに来てしまつたときに、確実に困つたことになる。

嘘が嘘だとわかつてしまつこと自体は、アル＝ラシードの中のリルの心象が悪くなるだけなので大した問題ではない。恐らくアズイ・アシーケを無事抜けるなりして別れれば、会つこともないだろう相手であることだし。

何が問題かと言うと、アズイ・アシーケの夜を甘く見ると、本当に死にかねないということである。間違つた知識を植えつけたがために、アル＝ラシードが生命の危機に晒されてしまつたら、寝覚めが悪いどころの話ではない。

なので信じてもらえないことを想定しつつも、一応真実を告げたわけだが、あまり不審がられると、アズイ・アシーケを共に抜け

る行程で問題が起ころる可能性もあつた。

自分の判断の是非に悩むリルだが、いつの間にか咳くのを止めていたアル＝ラシードが自分をじっと見ていたことに気付き、何とかフォローを試みることにした。

「ええと……その、根拠は兄様の研究成果だから、いきなり信じろつて言つても難しことは思うけど、実際ここだと寒くも暑くもない。少なくとも全くのたらめだつてことはない、と思つんだけど」

どうかな、と、恐る恐るアル＝ラシードを見る。

すると、アル＝ラシードは考え込むように一度目を閉じた後、しばらくして何か自分の中で折り合ひをつけたらしく頷いた。

「わかった。その『間隙』とやらの中にいるから、寒さや暑さを感じない、ということなら、とりあえず納得できる。原理なども気にはなるが、優先すべきはそれではないしな。……ここを出れば文献通りの気温だということだが、ならばどうするんだ？ 私もお前も、そんな寒さに耐えられるような格好はしていないだろ？」

「それは焰が居るから大丈夫。実体化した時にわかつたんじゃないかと思うけど、焰は炎の眷属だから。わたしたちの周囲の気温だけ適温に変えてもらつて、移動するときに凍えなによつにするつもり」

そう言つと、アル＝ラシードは少し驚いたようだつた。

「精靈は【禁智帶】でもそのようなことができるのか？」

「うん。精靈が使うのつて、魔法とも魔術とも違う力だから……それでも【禁智帶】だとちょっとつまづく力を揮えないらしけど」

言いつつ、蹲つて何やらやつているらしい焰に目を向ける。リルたちからすると背中しか見えず、何をしているのかはわからないのだが、随分熱中していいるらしい。視線に気付く様子は全くない。

「……あんただけど、精靈なのは間違いないから。寒さに関しては心配しないで大丈夫だよ」

少しでも安心してもらひたふうにと笑みを向けたのだが、アル＝ラシードは無言でふいと顔を背けた。

（あれ、何がまずいこと言っちゃった？ それとも『誰が不審者と馴れ合つか！』的な意思表示だったり？）

そう長い間ではないと言えど、共に行動するのだから、円滑な人間関係を築きたいとリルは思うのだが、アル＝ラシードは違うのかもしれない。

（まあ、わたし、怪しいもんね……）

王族だし、対人関係も警戒から入るのが基本なのかもしれない。無理に打ち解けようとすることは逆効果だろうと考えて、リルはとりあえず気にしないことにした。

「それじゃあ、出発してもいいかな？」

極力優しい声を意識して尋ねると、アル＝ラシードは顔を背けたまま、ぽつりと返した。

「…………構わない」

それにリルは少しだけ笑って、「そっか」と頷く。  
空を見上げれば、少しずつ欠けゆく白銀の月が煌々と照っている。  
それを確認してほっと息をつくリル。

（時間の方は大丈夫そうかな。見た限り、今はアズイ・アシーケの中も凪いでるみたいだし、移動しても問題ないよね）

【禁智帯】の中は、『外的魔力』が欠如している関係で時折荒れことがあるのだと、リルはザードに聞いていた。

アズイ・アシーケにおけるその兆候は、月が赤く染まること。綺

麗な白銀の月に、どうやらそれに遭遇せずに済みそうだ、と安心する。

荒れる、と一口に言つてもその内容は様々らしい。最も多いのが砂嵐だということは知つてゐるが、それ以外はリルもよく知らなかつた。しかし、砂嵐にしろ、それ以外にしろ、巻き込まれず済むのならそれに越したことはない。

（……つて言つても、アズイ・アシーケークから出るときには絶対に何かしら起じるわけだけど）

リルに可能なアズイ・アシーケークからの脱出方法は、ある意味安定していると言えるアズイ・アシーケークの状態を、多少なりと振り動かす乱すことになる。少なくとも、今の『凧』の状態を崩すことになるのは確実だ。できる限り迅速にアズイ・アシーケークの外に出るつもりではあるが、それでも危険な目に遭う確率はゼロではない。

とりあえず、アル＝ラシードには危険が及ばないようじょうとひつそり心に決める。

「あ、やつと出発？」

暇に飽かして砂で遊んでいたらしい焰が、立ち上がつたリルを仰ぎ見る。

ずっと我関せず状態だったことに色々言いたいような、もうどうでもいいような気分になりつつ、リルは焰に近づいた。

「うん、出発。気温の調節は任せるけど、大丈夫？」

「大丈夫大丈夫。それくらい軽いって。微調整までお任せあれ」

「いや、そつちじやなくて魔力残量のこと」

言えば、焰は自分の内を探るような少しの間をおいて、にっこり笑つた。

「そつちもだいじょーぶだつて。満タンとまでは言わねーけど、半日くらい実体化できる程度にはあるし」

リルは焰の契約者だが、『魔力因子』を持つていないので、焰に魔力を供給することができない。なので、焰はリルの周囲の人間に主に兄たちの魔力を精霊石イースを通じて吸収しているのだという。兄たちは焰をリルの護衛代わりのように扱っているので、魔力を吸収されることには全く頓着していない。というかむしろ推奨している。

イースヒヤンデに居れば魔力について心配する必要はないのだが、ここはイースヒヤンデではない。精霊石イースに貯められている魔力が尽きたら、焰はこうして顕現することもできなくなってしまうのだ。

しかし、リルが思っていたよりも貯めてあつたらしい。実体化には結構な魔力を必要とするのだが、それを半日行える程度にあるのならば問題ないだろう。

「それなら大丈夫かな。じゃあ、よろしくね って」

まだ座り込んでいる焰の傍らに歩み寄つたりルは、何気なく視線を下に向けて、頬を引き攣らせた。

「ほ、焰、それ……」

「んー？ スゲエだろ。俺の自信作！！」

そこにあつたのは、砂で描かれたとは思えないほど精緻な肖像画と言つて良いか悩む砂絵だった。ついでに上手すぎて引くレベ

ルの代物だった。

色彩は無く、金色の砂のみで表現されているはずなのに、今にも動き出しそうなくらいに生氣を感じさせる仕上がりの、間違いなく素晴らしい出来の砂絵だったが

「何でわたしの姿なの… しかもこれ小さい頃だし… つていうか泣いてるところだし…！」

「えー… 何となく？」

「何となくでこんなの描かないでーー。」

「悪趣味にも程があるでしょーー。」と怒鳴るリルにも、焰は悪びれる様子はない。

「何となくだけど、一応理由はあるんだぜ？ ピーチセイドで砂絵にするなら、もう見れない昔の姫さんがいいなーって思つてさ。ちつさい姫さんが泣いてるのってすっげえ可愛かったから、つい。いや今の姫さんも可愛いんだけど、それとはまた違うって言つた。こう、ちつさいてふにふにしてただでさえ殺人的に可愛いのに、顔真っ赤にして必死で泣き止もうとしてるんだけどできなくて、恥ずかしがって小さくなつて声殺そうとしてるけど殺しきれてない感じの

「ちょ、焰…！」

何かもうこりこりとつゝこみぢこみがありすぎると、そして恥ずかしいことこの上ない。

(これだから精霊はつー。)

精霊<sup>イサ</sup>は気に入つた人間としか契約をしない。つまり最初から契約者にベタ惚れ状態と言つても過言ではないのだ。

そして人間の羞恥心とかそういうもののへの理解が基本的でない。

少なくとも焰はない。どちらかと言えば気の利くほうであるのことで、変なところで理解が足りなかつたりする。

リルは無言で焰の正面に回り、全身全靈を込めてその砂絵を崩した。

「あー！ 姫さん何するんだよ！？」

「それでは、お詫びの言葉だから！」

# 「涙の汗と涙の結晶」

「心意気の問題だつての!! あーあ、見るも無残な姿になつたやつ

て  
…  
」

一  
だ  
て  
『  
間  
隙  
』  
だ  
か  
ら、  
放  
つ  
て  
お  
い  
た  
ら  
半  
永  
久  
的  
に  
残  
つ  
ち  
や  
う  
で

わがじそんなんの面えにわねい！」

ね。せんと気温の調節してね?

「はいはい、りょーかーい」

名残惜しそうに砂絵の残骸を見つめつつ、焰が頷く。

「……よくわからないのだが、もういいのか？」  
「うん、大丈夫」

リルと焰のやりとりを黙つて聞いていたアル＝ラシードが怪訝そうな顔をしつつ尋ねてくるのに、リルは疲れた笑みを浮かべて答えた。

……とりあえず、アル＝ラシードに見られなかつただけでよしと

しょり、と自分を慰める。

嫌がらせかと思うくらい見事な再現つぱりだつたのだ。さすがにあんなもの見られたら平然と会話できない。

『氣をとつなおして、リルはアル＝ラシードに近づく。

「それじゃあ出発しょりか」

「了解した」

言しながら立ち上がるアル＝ラシードを見て、リルは改めて彼の幼さを意識する。身長のこともあって年齢よりも幼く見られがちなリルと比べても、頭一つ分くらいの差があった。

全体的に華奢で頼りなげな印象を抱くのは、病弱ゆえに見た目だけは憐れなセクトに通じるものを感じるからだろうか。

王族だから食つや食わざの生活をしているとは思えないが、ちゃんと食べてるのかな、とリルは少し心配になつた。

じつと自分を見つめたまま動かないリルに気付いたアル＝ラシードが声をかけるまで、リルはシャラ・シャハル王族の食生活に思いを馳せていたのだった。

「ねえ、少し気になつたんだけど

『間隙』を出て、慣れない砂地に足をとられながら何とか歩みつつ、アズイ・アシークにおける注意事項（ザード作）をアル＝ラシードに伝え終えたのが少し前。

無言で歩き続けるのも気が滅入るし、と思つて話の種を探していたのだが、ふと疑問を抱き、リルはアル＝ラシードに視線を向けた。

「何か？」

アル＝ラシードは、最初こそ何度も転んだものの、だんだんコツが掴めてきたらしい。足元に注意を払い続けずとも大丈夫だと判断したようで、不思議そうにリルを見上げてきた。

ちなみに焰は、魔力の消費を抑えるために精霊<sup>イース</sup>石に戻り、リルたちの周囲の気温調節に専念している。おかげで寒さに凍えることがなく快適な道行きだ。

リルはアル＝ラシードを見つけたときのこと、そして彼の言葉を思い返しつつ、抱いた疑問を口にした。

「君が誰かの手によつてここに連れて来られたんなら、その連れてきた人つてアズイ・アシークを確実に抜けられる算段があつたつていうことになるよね？」

すると、アル＝ラシードはそのことに思い至つていなかつたらし

く、数瞬おいて戸惑うような声を出した。

「……あ、ああ。そういうえば、そういうことになるのか。アズイ・アシーケを抜けられるかどうかということのは、ほとんど運による聞いていたのだが、そうではなかつたのか？」

「わたしもそう聞いてるんだけど……兄様とかは規格外だし

アズイ・アシーケは、まだシャラ・シャハルも存在しなかつたよう遠い遠い昔に、魔術を生み出した大国があつた場所にある。その国は、大きすぎる力を持つたがために内乱を起こし、何も残さず滅びた。

それは禁じられた魔術によつてのことだつたらしい。その魔術の影響なのかそうでないのかは定かではないが、その国があつた場所から『外的魔力』が失われてしまつた。そしてその周囲を、国防のためだつたらしい結界が覆つている状態だ。

アズイ・アシーケを抜けられるかどうかが運によると言われているのは、その結界がアズイ・アシーケから出るのを阻むからだ。元々は外敵を拒むためのものだつたが、何らかの理由で効果が反転したらしい。侵入を拒むものではなく、内から出ることを許さないものへと変質している。

アズイ・アシーケから出ることができた幸運な者たちは、結界の綻びがある場所にたまたま行き着いたか、もしくはアズイ・アシーケから『はじかれた』のだろうとシーズは言つていた。

結界自体の強固さは、今現在まで残つてゐるという時点で言及するまでもないものであるが、変質した影響なのか、稀に綻びが見つかることがある。

ただし、結界には自動修復機能もあるので、一度見つかつた綻びがいつまでも残つてゐるということはありえないのだが。

アズイ・アシークは、言つてしまえばこの世の理が通じなくなつてゐる異空間に等しい。故に、『どこか』へ繋がる歪みのようなものが現れることがあり、それによつてアズイ・アシーク外にとばされることを、『はじかれる』とシーズは表現していた。

それに遭遇してアズイ・アシークを抜けられるかどうかは運以外の何ものでもなく、アズイ・アシーク内の別の場所に繋がる確率のほうが高いらしいので、確実に抜けられる手段というのは流布していない。

シーズの要請で度々アズイ・アシークを訪れているザードはと言うと、歪みを利用するのも、結界の綻びを利用するのでもない、裏技ともいうべき方法で出入りしている。

その方法はリルには使えないものなので、リルはシーズが研究によつて生み出した、魔術を一時的に無効化する方法で結界を抜けようと考えていた。

しかしその方法は一般に知られているものではない。魔法ならともかく、魔術はその希少さもあいまつて、現在ではあまり研究が進んでいないのだ。

魔術が一般的だった頃はその限りではなかつたが、魔術を生み出した大国が滅びたときに、魔術に関する技術や記録はほとんど失われたと言われている。

だからこそその疑問だつたのだが　　リルには一つだけ、心当たりがあつた。

聞くか聞くまいか悩んだ挙句に、しどりもどろに切り出す。

「その……答えられないならそれでいいんだけど、シャラ・シャハル王家に魔力がない人つていない？」

「魔力がない人……？」

途端怪訝そうな顔になつたアル＝ラシードに、リルは肩を縮こまらせた。

（『魔力がない』つていうか、正確には『発現因子』がない人なんだけど、その辺の説明、わたしじやうまくできないし。そもそも信じてもらえるかわからないし。一般的には『魔力がない』つて認識になるはずだから、間違つてはないとね？……でも、この様子だといないのかな。シャラ・シャハル王家なら条件も揃つてるから、居てもおかしくないと思ったんだけど）

リルの言葉の意味を汲み取れなかつたのか、俯き気味に考え込んでいたアル＝ラシードは、しばらくして得心いつたように顔を上げた。

「それはつまり、他者に感じ取れないほど弱い魔力しか持たない人物が居るかどうか　我が王家に不義の子が存在する否かを聞いているのか？」

「え！？」

「違うのか？」

予想外なアル＝ラシードの言葉に驚愕の声をあげると、アル＝ラシードもまた驚いたように目を丸くした。

「違うよ！　正統な血をひいてるのに強い魔力を持たない人がいるってこと！」

この世界では、魔力というのは大なり小なり誰もが持つているというのが一般的な見解だ。他人が感じ取れるほどの魔力を纏うのは魔法士や魔術師、もしくはその才覚がある者がほとんどで、そ

れは生まれたときから無意識に魔力によつて身体を守りつとするためだ。

魔力の強さは遺伝するものではなく、魔法士の子が魔法士になるほどの魔力を持つて生まれるとは限らない。

しかし、例外も存在する。

それが、シャラ・シャハル王家を筆頭とするような、連綿と続く強力な魔力血統だ。

血をひくものが『必ず』強い魔力を抱いて生まれるとされる血統。大体においてその血統は、長い時を経て認知され、神格化されていく。

結果、王家やそれに連なるものとなるのが通例だった。

「いや、それならばやはり、不義の子が居るかということではないのか？」

「…………？」

十歳を過ぎたばかりだというアル＝ラシードの口から『不義の子』などという言葉を聞くのは大変な違和感だったが、それに目を瞑つて問いかける。

「我が王家において、強い魔力を持たぬ者というのは、国生みの精靈に認められていない。正式な契りを交わしていない男女間の子供だけだ。正式な契りを交わしているならば、どんなに血が薄くとも、魔法士になれる程度には強い魔力を持つて生まれるはずだが」

「…………。 そうなの？」

「ああ。…………知らずに尋ねたのか。 それで、それがどうかしたのか

？」

「え、つと、その……そういう人なら、アズイ・アシークを抜けら

れるはずなの。理論上は、だけど「

ある程度以上の『魔力因子』を保有し、『発現因子』を持たない者　長く続く魔力血統にこそ現れる、その性質を持つ者は、アズイ・アシークを覆う結界を抜けられる。

詳しい仕組みまではリルは知らないが、『そう』であることだけは教えられていた。

その実例を知っている　故に、何らかの要因で己がアズイ・アシークと外界を行き来できると気付いたシャラ・シャハル王家の誰かが、その特質を使ってアル＝ラシードをアズイ・アシークに閉じ込めよう計画したのではないかと思ったのだが……アル＝ラシードの言を信じるなら、その考えは間違つていたことになる。

（……でも、他にアズイ・アシークを確実に抜けられる方法なんて、シーズ兄様並みの研究馬鹿　じゃなかつた、魔術に関して研究熱心な人が開発とかしてない限り無いと思うんだけど。そもそも今は『過去』だから、そんなのがあつたなら兄様たちが言わないはずがないし、アル＝ラシードが知らないだけ……？　でも、『魔法大国』で、しかも魔力血統　王家の血をひいてる人間が、それを隠すことなんてできる？）

考えれば考えるほど深みにはまつていくような気がして、リルは一旦それについて考えるのを止めたことにした。

アル＝ラシードをここに連れてきた人物がどんな手段でアズイ・アシークを抜けたにしろ、一度失敗した計画を再度実行に移すということは考えにくい。

（それに、もしアル＝ラシードの知らない誰かが『そう』だとしても、多分私には何もできないし　『しちゃいけない』んだよね……）

ザードほどに臨機応変に対応できる能力があるのなら別だが、これが『過去』であることを抜いても、リルが というよりは『リルの祖国』スピアンデに関係するモノがそれ以外のモノに深く関わるのは歓迎されることではない。

きっとリルが望むなら兄たちも両親もそれを許してくれるだろうけれど、だからこそリルはそれに甘えてしまいたくなかった。

かといって、それですべてを割り切ることもリルにはできない。リルが思う通りの人物が存在するなら しかも『魔法大国』シャラ・シャハルに存在するなら、その人が辛い境遇に置かれている可能性は限りなく高い。

ましてや、『魔力がない』と判断されることが、『不義の子』である証となってしまうらしいシャラ・シャハル王家のの人間であれば尚のこと。

（今ここでこうやって考えても仕方ない、か……。まずはアル＝ラシードを無事にアズイ・アシークから連れ出さないと）

どちらにしろ、今リルにできるのはアル＝ラシードをアズイ・アシークから連れ出すことだけだ。それ以後のことはそれが叶ってから考えても遅くはない。

リルは気を取り直して、アル＝ラシードに別の話題を振ることにした。

「……『巡回』に当たっちゃった、かな」

「……？」

ほどなくアズイ・アシークの最端に辿り着く、という場所で、リルは足を止めた。少し遅れて立ち止まつたアル＝ラシードが、リルの言葉の真意が汲み取れずに首を傾げる。

それに何と説明するべきか迷つたリルは、言葉を選んで口を開いた。

「『創国の六葉』って知ってる？」

「『創国の六葉』……？」

記憶を探るよう繰り返したアル＝ラシードは、思い当たるものがあつたらしい。少しの間をおいて、「ああ」と頷いた。

「文献で見た記憶がある。古の魔術興国の祖となつた、六人の人物のことだつたと記憶しているが」

淀みなく答えたアル＝ラシードに、聞いておきながら、リルは内心驚いていた。

『創国の六葉』というか、現在アズイ・アシークが在る場所にあつた国については、殆ど記録が残つていないと言つても過言ではない。数少ない文献を『魔法大国』シャラ・シャハルが多く所有しているのは周知の事実であるが、『創国の六葉』についてとなると、名の通り国の成り立ちに関わる内容だ。余程古い文献であるか、

後の世に新たに編纂されたか どちらにしろかなり希少な知識が  
シャラ・シャハルには伝わっているということになる。

認識を改めないといけないかもしれない、と思いつつ、リルはそれを表に出すことなく話を続けた。

「そう、その『創国の六葉』なんだけど 彼らが後に結界の要になつたんだって話は知ってる?」

「……結界の、要? 結界とは、今も稼働しているという大規模結界魔術のことだらうか」

リルが頷くと、アル＝ラシードは難しい顔をした。また濃くなつた眉間の皺に、何だか申し訳ないような気分になるリル。

「それは、……人柱という意味以外に解釈しようがないんだが」「 そういう意味での『要』で合つてるよ、アル＝ラシード。 ……あんまり知られてないとは思つけど……」

『創国の六葉』 建国の一役者とも言える六人の英雄的人物は、その身を以て国を護るために結界を為した。

半永久的に展開する大規模魔術のための人柱。そうなることを己の意思で選んだのか、それとも強要された末のことであつたのかは今はもう、知る術はない。

ともかくも『創国の六葉』は今も尚、結界の要として機能している。それは効果が反転した今も変わらない。けれど、国が滅びた原因である禁じられた魔術が、それらに与えた影響については、恐らくイースヒヤンデにしか知られていない。

「……ここにあつた国が滅びた原因と関係があるんだらうけど、結

界の魔術がおかしくなつて……。大枠の、『結界を創り出す』つていうのは変わつてないんだけど、外からの侵入を拒むものだつたのが、反転して内から出さないものになつてゐるし、綻びが増えたのもあつて『六要』が現出するようになつてゐるらしいの。兄様たちに聞いただけだから、実際に見たわけじやないんだけど

どこまで話してもいいものか どう話せば不審に思われないか考えつつ言葉を紡ぐものの、既に手遅れな気がひしひしとする。それでも説明しないわけにはいかないのが悲しいところだつた。

「現出……？」

怪訝そうに呟いたアル＝ラシードに、リルが更に言葉を重ねようとした時だつた。

ぞわり、と肌が粟立つ。魔力を感知することがほぼできないリルですら感じられる、異様なまでに濃く そして禍々しさすら覚える魔力の塊が、唐突にそこに現れた。

（見つかっちゃつたか……。精霊石の氣配でアル＝ラシードの魔力も隠せるかと思つたけど、契約者がわたしだし、そこまでは無理だよね）

反射的に固まつた身体を慎重に動かし、リルはそこに現れた存在に視線を向ける。

ちらりと見えたアル＝ラシードは、魔力に当てられたのか、顔色を失くして硬直していた。それに心配にはなるものの、今は声を掛けられるような状況ではなかつた。

現れたそれ《・・》が何であるかを、リルは正確に知つていた。

その、名前も。

『 汝に 』

声ならぬ声が空気を震わす。美しい樂の音にも似たそれは、状況さえ違えば聞き惚れるような妙なる響きだった。

ふわり、と『声』の主の衣装の裾が翻る。『彼女』が何者であつたかを雄弁に語る、『舞』のためだけに特化したその出で立ち。しゃん、と清廉な鈴の音が鼓膜を震わせる。その音もまた、現実に在るものではない。

両眼を覆うように巻かれた布の存在すら、彼女の美しさを損なつてはいなかつた。花の顔を予感させる、整つた口元が再び動く。

『 汝に、証ありや?』

問う彼女に、『意思』と呼べるもののが存在しないことをリルは知つていた。結界の要 そして番人としての役割をなぞることしか、彼女にはできない。

『盲田の舞姫』シルメイア。

『創国の六葉』のひとりであり、のちに禁術の基となる魔術について、生者とも死者とも呼べない存在 結界の要となつた人物。守るべき国が跡形もなく滅びた瞬間から、まるで幽鬼のように結界内に現れるようになったのだと、兄たちから聞いていた。『六葉』それですが、一定区域を『巡回』するように動くことがあるということも。

まさか、実際に目にするととは思つていなかつたけれど。

少しでも気を抜けば気圧されるような、威圧感さえ覚える濃密な魔力。それは彼女シルメイアが肉体を持たない代わりに、魔力によって身体を形作っているからだ。

その在り方は、精靈を真似てはいるものの、似て非なるものでしかない。与えられた役割『命令』と言い換えてもいい。以外、何をすることもできない、しようと『思ひ』こともない、人形のような存在。

イス精靈が淡く明滅するのが視界に入る。焰が心配しているのだとわかつて、少しだけリルは笑つた。そして『シルメイア』を真正面から見据える。

掛けられた問いに返す言葉は、決まつていた。

「証は、ありません。あなたが創つた、あなたが守りたかった國は滅びました。……それなのに、未だに役目に縛り付けたままで、ごめんなさい」

届かない言葉だと知つていても、言わずにはいられなかつた。

兄達の中でも、唯一現出した『六葉』と顔を合わせたことのあるザードも、遭遇する度に無駄だと知りつつも謝罪するのだと苦い笑みで言つていたのを思い出す。だからさつさと結界を解除する方法見つけなよ、とシーズをせつづいていたのも。

全て諸共に滅びたのなら、『創國の六葉』が人柱となつたままであることもなかつただろう。けれど、現実に彼らは未だに『要』のままで、そして、魔術に関する知識の大半が失われた後に彼らを解放するには、長い長い時間が必要だった。

自由に結界を出入りすることができるのには、滅びた大国の血を引く　その『証』たる魔力を持っている者だけだ。

リルには『魔力因子』がないため魔力そのものがないし、そもそも魔力があつても『証』と認めてはもらえない。質の異なる魔力を、『シルメイア』が気付かないはずがないのだから。アル＝ラシードの魔力も同様で、だからここでリルが取れる選択肢は一つしかなかつた。

『シルメイア』から田を逸らさないまま、アル＝ラシードに近付く。硬直状態からはなんとか脱却したらしく、リルの行動を窺つているのが気配でわかつた。

『シルメイア』は未だ動かない。『焰』の存在が『シルメイア』の行動を阻害しているのだろうと氣付いて、リルは迷いを振り捨て、叫んだ。

「走つて！」

同時にアル＝ラシードの背を押す。殆ど突き飛ばすような形になつたけれど、そこまで気遣つていられる余裕はなかつた。

無理やり走らされる形になつたアル＝ラシードが、リルがその場に留まつていることに気付いて足を止めようとするのに、もう一度叫ぶ。

「わたしのことは気にしなくていいから！　そのまま走つて！！  
すぐ追いかけるから！」

一瞬迷うような素振りを見せたアル＝ラシードだったが、リルを気にする様子を見せつつも、速度をゆるめることなく走つていく。それを見届けて、リルは『シルメイア』に視線を戻し、精霊石に触イス

れた。定められた通りに指先で叩き、思念で以て呼びかける。

( イース・ナル 【焰】、出てきて )

全て伝える前に精靈<sup>イース</sup>石が明滅し、瞬く間に宙に炎が広がる。一瞬で現れた焰は、どこか複雑そうな顔をしていた。

「……お願いね」

そうリルが言えば、心底氣の進まなさそうな声で「了解」と答える。リルは苦笑して、それから腰元に提げていた短剣を手に取った。鞘から引き抜くと、刀身がきらりと月光を反射する。

リルはそれを短剣を持つと逆の腕に当て 躊躇いなく、引いた。

刃の軌跡を、痛みというよりも熱さが走り、そして鮮やかな赤が流れ出る。傷口から溢れ出た血を指先で掬い、リルは素早く砂地に呪印を刻んだ。

『内的魔力』のないリルには、魔法も魔術も使えない。『魔力因子』と『発現因子』、両方を持っていなければ、『内的魔力』は持ち得ない。それはつまり、魔力によって何かを為すことができないということだ。

けれど、それに抜け道があるということをリルは知っている。

『発現因子』、『魔力因子』、どちらか一方のみでは魔力によって何か事象を起こすことができないのは確かだが 魔法や魔術で形作られたものや事象にならば干渉できるのだ。

本来、リルがシリーズに教えてもらった方法は、もう少し穩便なものだった。しかし、今の状況で時間をかけてそれを為すことはできない。

出来る限り迅速に場を乱し、崩し、一時だけでも『結界』を消失させるためには、己の血を使うのが最も適していた。だからこそ、リルは迷うことなくそれを選んだ。

……兄たちに知られたらどんな反応をされるのか分かっているから、リルとしてはできるだけ選びたくはなかつた選択肢だったのだが、『六葉』に遭遇してしまったならば仕方ない。『証』がない『侵入者』と見做されれば、どう考へても穩便に別れることなどできないのだから。

呪印が淡く光る。現在ではほぼ失われたと言われる古の魔術言語

それによつて紡がれた呪が力を持つ。

リルは『発現因子』を持つてゐるから、自ら事象を起しすことはできなくとも、今在る事象に干渉することはできる。

そつ、『シルメイア』という魔術的な『要』に干渉することだつて。

『

声なき声が悲鳴に似た響きを奏でる。『めんなさい、』とリルは心の奥で呟いた。

苦しげに身を捩る『シルメイア』の姿が歪む。

『シルメイア』が現出できるのは、結界を形作る魔術の中に、『六葉』の肉体から『内的魔力』を自動生成する術式が組み込まれてゐるからだ。見えない糸で『要』たる肉体と繋がつた『シルメイア』は、ほんの少しその糸に干渉するだけで、仮初の身体を保てなくなる。

死ぬわけではない。何故なら『シルメイア』は生きていなかつて、消滅するわけでもない。結界の魔術が解除されない限り、『六葉』は『要』として在り続けるのだから。

それでも心が痛むのは、『彼女』はただ役割を果たそうとしただけだと知つてゐるからだ。

『侵入者』として『排除』されるわけにはいかないけれど、リル自身は未だ害を『えられたわけではない。自分一人なら自分と焰だけだったなら、こちらから手を出さずに逃げ出すことも考えた。そもそも、リル一人であれば、『六葉』に存在を気付かれる可能性はゼロに等しく、現出した『六葉』に会つこともなかつただろうが。

けれど実際にはリルは一人じゃなかつたし、先行させたアル＝ラシードと共に逃げていたとして、足止め無しに『シルメイア』から無事に逃げ出せたかというと、それは恐らく無理だつただろう。どちらにしろ、もしもの話には意味がない。

くらり、と視界が傾いだ。ふらついた身体を焰が支えてくれる。苦笑して礼を言おうとしたリルだが、きちんと言葉になつたのかも自分では分からなかつた。視界が奪われ、音も、触れる感覚も遠くなる。

流れた以上の血が失われていくのを感じる。正確には、血ではなく『発現因子』なのだが。

焰が慎重に、呪印に魔力を注ぐ気配がする。思うようにならない身体がもどかしく、けれど、自分にはどうしようもないということもリルには分かつていた。

意識を失えれば楽なのだろうけれど、呪印が作動している間はそうはいかない。ひたすら耐えるしかなかつた。

そうして、どれほど経つただろうか。

ふ、と体内から何かが失われる感覚が消えた。

同時に、ほんの少し身体に注がれた魔力にリルは気付く。傷を癒

すためと それから。

(……焰?)

声にならない疑問を感じ取つたのだろう。焰の手が少し乱暴にリルの目を塞ぐ。

「 負担が掛かり過ぎた。眠つな、姫ひさ。じゃないと回復が追い付かない」

でも、と紡ぎかけた言葉は音にならず、焰によつてもたらされた眠気が、ただでさえギリギリの淵で踏みとどまつていたリルの意識を沈めようとする。

抗うことのできないそれに導かれ、リルは眠りに落ちた。

## 【禁魔帯】の外

田を覚ましたリルは、焰に担がれている自分を知覚して、次いで同じように反対側の肩に担がれるアル＝ラシードに気付いた。

「田、覚めたか。姫さん」

気配で気付いたのだろう焰が声を掛けてくる。ひとまず地面に降りしてくれるよにリルが頼むと、焰は快くそれを了承した。

安定した大地に足を下ろし、周囲を観察する。視界のどこにも砂丘はない。地面は草地で、空に輝くのは上弦の月。無事にアズイ・アシードから出たことができたのだと、周りの景色が雄弁に語る。

それは歓迎すべきことであり、喜びこそすれ疑問を持つこともなかつたのだが。

「……えーと、焰。運んでくれてありがとう。あと傷も完治させてくれてありがとう。それで、アル＝ラシードはなんで気絶してるので？」

無理やりに魔術に干渉したことによる体調不良は既に無い。『発現因子』の豊富さだけならば並みの魔術師や魔法士にも匹敵するとシーザに言われたりルだ。回復の早さも折紙つきである。

しかし、危険な目に遭わないように そして見られないために先に行かせたアル＝ラシードが意識を失っているのはどうこうことだろう。

あの区域に現れる『六葉』は『シルメイア』だけのはずだし、アズイ・アシーク内に他に異変はなかつたはずだ。もちろん転んだりぶつかつたりして意識を失うようなものもない とザードには聞いていたのだが。

リルの問いに、焰は「さあ？」と軽い調子で首を傾げた。

「俺もよくわからんねえんだよな。姫さん坦いでアル＝ラシード追いかけたら、アズイ・アシーク出た辺りで倒れてて。一応診てみたけど、特に外傷もないし。アズイ・アシークから出たせいっぽいかなーとは思うんだけど」

「アズイ・アシークから出たせい？」

「倒れてた場所と残つてた痕跡からの推測だけだ。アズイ・アシークから出たとこで一回倒れてる つつーか膝着いたっぽいんだよな、アル＝ラシード。で、そこから足引きするみたいにふらふら歩いて、ちょっと行つたとこで本格的に倒れた感じの跡が残つてた」

焰の言葉にリルは考え込む。状況は分かつても、アル＝ラシードが倒れた原因是それからはさっぱりわからない。そんなリルに、焰は続けて言った。

「で、これも多分なんだけど。これって『魔力酔い』に似てね？」

「……『魔力酔い』って、あの『魔力酔い』だよね？」

「姫さんも何回かなつたろ。まあ、姫さんは普通の『魔力酔い』とは違うけどわ」

『魔力酔い』とは、一般的に『外的魔力』の濃度の差異によつて起つるものだ。『魔力酔い』を起こすほど濃度の差がある土地はそうさうないが、例えば大規模な魔法や魔術を使うための下準備の段階で、人工的にそれが作られることがある。

他の場所からそこへ足を踏み入れることで、通常よりも濃い『外的魔力』に、あたかも酒に酔うように酩酊するのだ。

【禁智帯】であるアズイ・アシークには『外的魔力』が無い。しかし、アル＝ラシードのような、『魔法大国』シャラ・シャハルで育つた者にとっては、密度の濃い『外的魔力』はなくてはならないものだろ。そこにあるのが当然、無いことなど考えられない、というような。

つまりアズイ・アシークに入った時点で、『外的魔力』が全く無いという異常な環境　　あくまで當人にとっては、『魔力酔い』の逆の現象が起こることは考えられる。『外的魔力』を感じ取る能力の強い者であれば尚のこと。

しかし、目を覚ましてからのアル＝ラシードにはその様子が見られなかつた。だからリルもその可能性を思いつかなかつたのだが。

「……もしかして、『加護』のせい？」

「ん？」

「アル＝ラシードは、【加護印】<sup>シャーン</sup>が自分を護るつて言つてたよね。その『加護』によつて、アル＝ラシードの身体が【禁智帯】の環境に慣らされていたつてことはない？」

アル＝ラシードの身体が【禁智帯】の環境　　『外的魔力』が無い環境　　に【加護印】<sup>シャーン</sup>によつて強制的に適応させられていたのなら、アズイ・アシークを出た途端に本来の意味での『魔力酔い』を起こすことは十分考えられる。……何故そこでは『加護』が現れなかつたのかは謎だが。

「あー……言つてみりや、そつかもな。シャラ・シャハル王家の

人間が、アズイ・アシークでああやつて普通に活動できたのが不思議なんだし。いくら昔より魔力の強さの平均が変わつてるからつて言つても、魔力血統に連なる奴が平然としてるはずないよな。」

：『内的魔力』が発現してないならともかく

「アル＝ラシードの話だと、そういう人も今は居ないみたいだし。そもそもアル＝ラシードは『加護』があるからか、結構魔力強いよね？」

「逆じゃね？『加護』が現れるのつて魔力が飛び抜けて強い奴っぽいし」

何気なく焰が言つた内容に、リルは「え？」と目を瞬いた。

「アル＝ラシードって、魔力強いの？……えっと、シャラ・シャハル王家の間だし、強いは強いんだろうけど、そんな感じしないよ？」

「そりや そりや。『加護』……つづーか【加護印】か。そつちに魔力の大半が流れてる。多分人間に感知できる魔力 자체はそんな多くないな」

精靈イサが魔力に関する事を読み違えることはほぼ無い。その精靈イサである焰の見立てが間違つてているとはリルは思わない。

けれど、【加護印】に魔力が流れ込み、それによつてアル＝ラシードの魔力の大半が外に感知できないということは。

「【加護印】つて、魔術とか魔法だったの？」

精靈の加護が顯れたものだという言い伝えは、間違いだったのだろつか。

そう思つてのリルの言葉に、焰は軽く首を振つて否定した。

「んにゃ？ 似てるけど違うな、これ。むしろ精霊が使うのに近い。あえて言つなら、『祈り』とか『願い』だな。子孫が幸せに生きられますように、ってか」

「……それは、初代の？」

「初代の親だろ。あと、もうちょい弱いのが重ね掛けしてる感じ？ これが初代に宿つてた方かもな。精霊<sup>イサ</sup>が力揮うのって考えるだけでいいからなー。呪いになる勢いで願つたから、本体がいなくなつても続いてる。迫害を受けないようにつてのもあつたんだろ。

多分、【加護印】<sup>シャーペン</sup>持ちは先祖返りだ。飛び抜けた魔力は本人も周りも不幸にする。目に見えて違ひがある方が、感覚で異端つて分かるよりいいと思つたのかね？」

「正直どっちもどっちじゃないかと思うけどな、と締めくくつて、焰はアル＝ラシードを抱えなおす。肩に担いでいたのを後ろに背負う形に。

「まー、じつやつて話してもアル＝ラシードが目<sup>ム</sup>覚まさないなら答え合わせの仕様がないし、つづーか本人だつて多分わかんねえだろうし。姫さんがどーしても気になるつてんならアル＝ラシードが目<sup>ム</sup>覚ましてから色々聞きやいいだろ。とりあえずとつとと国境まで行こうぜ？」

そう言わればそうだ。そもそもリル程度の知識と能力では、『魔力酔い』か否かすら満足に判別できないだろう。目<sup>ム</sup>覚ましたアル＝ラシードの身体に不調やそれ以外の異変が残らないことを祈るくらいしか、今はできない。

気持ちを切り替えて、リルは焰の隣に並んで歩き出す。格段に歩きやすくなつた地面に、進むペースも早まつている。これなら夜が明ける前に国境まで辿り着けるだろう、と思って、それ以降の行動

についてもほんやり考えてみる。

（とりあえず、アル＝ラシードには国境に着くちょっと前には田を  
覚ましてもらわないと困るな……ずっと焰を実体化させておくのは  
まずいし）

残存する魔力量については心配していないが、それ以外の問題がある。

いつ目が覚めるだらう、と固く目を閉じるアル＝ラシードの顔を  
眺めて、リルは僅かに眉根を寄せた。……それに目敏く気付いた焰  
に乱暴に頭を撫でられて、それはすぐに消え去つたが。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3773x/>

---

古国の末姫と加護持ちの王

2011年11月21日06時50分発行